

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年十月一日発行(毎月一回一日発行)
第十五卷第六号(通巻第一七四号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第174号

10. 2008

ひつつめ髪

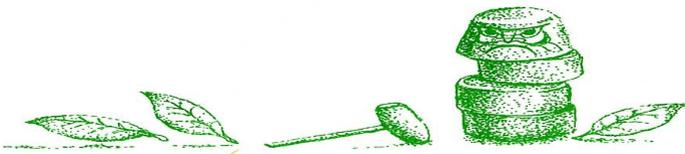
品川 鈴子

白衣にてひつつめ髪で敬老会

点検の下水穴から秋の声

霧籠もる柩に点火ボタン押す

大門はたまに開かれ八重芙蓉



推敲の紙きれ奪ふ大南風

誓子と見し剥き出し巖の早瀧

瀧見にと選ぶおくみの壺模様

潮滲みの木の香や海の家こぼ毀つ

水着にて睫毛反らすに余念なし

半世紀泳がぬままに皺む腕



玉

鈴

吟

大阪 岡本 幸枝

道をしへ上る下るに蝶夢の碑
百五翁織りし絵巻に風薫る
織匠の緯糸の技御簾透けて
射干を活けて仮名文字鵬雲齋
毬栗頭膝を揃へて夏茶碗

大阪 奥田 妙子

大琵琶の水量保つ梅雨に入り
真如堂縁より見上ぐ沙羅一輪
釈尊の宝前菩提樹が香る
菩提樹の花が浄土の香を放つ
万緑へ吟行の列呑み込まる

東京 片野 光子

六月の花嫁ぱつとカフェに現る
梅雨晴間用かたづかぬまま昏れて
デジタルに振り回される夏の宵
濃紫陽花ひと花残る雨の庭
訪れし柿衛文庫風薫る

兵庫 勝野 薫

日照雨去り苔の祇王寺風涼し
小筆持つ式部のおはす夏書院
蝉絡め網はぼるぼる女郎蜘蛛
羽化終へて翅を乾かす鬼やんま
梅雨残る林の窪にツチアケビ

兵庫 金田美恵子

軋みたる木造校舎昼の虫
秋入日天井低き廃校舎
秋夕焼包み込みたる廃校舎
秋の風足踏みオルガン弾き始む
廃屋の屋根に揺れたる草の花

兵庫 唐鎌光太郎

疎ましき人と出会ひしビヤホール
日除けして潜むが如くソファアール
炎帝の有無を言はせぬ底力
炎帝の驕るもほんのひと月ぞ
手かざしをしても余れる夏日影

兵庫 川合まさお

干草の変らぬ香鎌を研ぐ
奥池に藻の花あかり市の境
六月の花嫁に添ふ野立傘
コンジニへ苦瓜の蔓くゞりけり
老鶯に聞き恍れ外す腰道具

大阪 河村 泰子

白南風やガーゼ産衣を手洗ひし
指揮者ゐるごとし蛙の大合唱
朝顔や藍の鼻緒の下駄を出す
すみつこの余り苗はや出番なし
夕闇をふんわり包む綿の花

東京 岸 はじめ

掛袋はちきれてをり枇杷熟るる
純潔のしるし白百合ぽつと咲く
山峡に毒気を吐くや竹煮草
のうぜんの落花めざましくもありし
無期徒刑うたれしをとこ炎天下

東京 北川とも子

地の中の湿り纏ひて蟬生るる
炎昼を黙して歩む己が影
鉢巻の目元艶めき鬼灯市
万太郎句碑青鬼灯の香の中に
惜しみなくほむら散らして凌霄花

東京 北畠 明子

鳥語に耳傾けて籐寝椅子
朝ごとによく来るよく啼く四十雀
この道のこの風が好き山法師
青々と暮れて烏瓜の花
晴るる日を選び白靴下ろしけり

兵庫 木原 今女

宿泊館開く六時の朝曇り
泰山木の花びら拾ふ誰も彼も
帰省して父の揚げ齋濟ませけり
信号の青を待つ間の地のほてり
でで虫も幼も大好きな西瓜

兵庫 木村 美猫

滝壺は水の怒りを抱きとめて
青岬荷台で商ふ伊予なまり
炎昼にあぶな絵拵ぐ奥座敷
空蟬そは高みをめざす祈りとも
息深く弔辞書く父蟬しぐれ

愛媛 久保田由布

猫の額の青田国立公園に
行き暮れて姥百合が立つ砦址
紫陽花の萎毬にある朝昼晩
羽閉ぢておはぐる蜻蛉身を晦ます
盆踊川筋郷は平家鼠貞

薬草歳時記

(一七三) グミ(茱萸)

牛尾 曜子

稚子の肘にくくるや茱萸袋

松瀬 青々

ぐみは重陽の節句の時、ぐみを入れた袋(茱萸袋)を身につけておくと、災を避け、ぐみの枝を頭に挿すと、悪気を祓うといわれている。この風習は、平安時代(七四八〜一一八五)には盛大に行われたらしく、延喜式にも記されている。

ぐみは「ぐいみ」の意で「ぐいみ」とは、杭の実の意味でこの杭は刺のことであり、刺は備前の方言で「グイ」といわれ、「グイミ」とは刺の実の意である。我国のぐみの仲間も多く、あきぐみ(秋茱萸)、なわしろぐみ(田代茱萸、別名春茱萸)、なつぐみ(夏茱萸)、つるぐみ(蔓茱萸)などがあり、地方名をつけたものに、箱根茱萸、葛城茱萸などがある。単にぐみというと、秋ぐみが代表で秋に熟すぐみ、という意味である。本来ぐみは胡頹子と書く。

幼き日のごとくに食へり茱萸は酸く 浅井 周策

山村や農家の庭先に植えてあるぐみは、子供達の間食として楽しまれ、山歩きする大人には採集して、果実酒にする楽しみがある。実を採集したらその場でゴミを取り除く。家に帰ったら適当な大きさのピンを選び、実の倍を目安にホワイトリカーを入れるだけ。山では農薬の心配がないので洗う必要はないが、土ぼこりが気になる人は、水をかけて後干す。野生の実の果実酒は、その独特の香りと味を楽しむ。紅茶に落としても又楽しい。

薬 効 滋養強壮、止血、収れん、利尿等。

薬用部分 根、葉、果実果実をとって日干しにする。

成分 葉 茎皮、種子はセロトニンを含む。

使用法 乾燥した根、葉、又は果実を5〜10g煎じて飲む。

鳥取県では、葉と皮を煎じて飲むと胃腸に効くといひ、根を陰干しにして風邪薬として用いる。

参考文献 「牧野植物図鑑」 牧野富太郎著

「植物一日一題」 牧野富太郎著

「おじいちゃんの植物記」 小柳康蔵著

「草木スケッチ帳」 柿原申人著

「原色牧野日本植物図鑑」 牧野富太郎著

著者略歴神戸薬科大学卒

アキグミ [グミ属] (ぐみ科)

Elaeagnus umbellata Thunb.

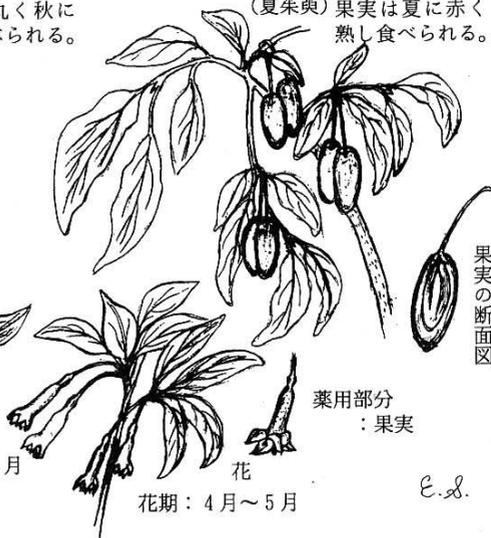
(秋茱萸) 果実丸く秋に熟し食べられる。



ナツグミ [グミ属] (ぐみ科)

Elaeagnus multiflora Thunb.

(夏茱萸) 果実は夏に赤く熟し食べられる。



ルビーめく茱萸の実筈に溢れけり	ピアスにもネックレスにもしたき茱萸	おかつぱの想いひろがる夏の茱萸	秋茱萸の海側ほむらして熟るる	乳を吸ひぐみの実の渋きをも吸ふ	暗黒より胡頹子一枝を折り来たり	茱萸噛めば仄かに渋し開山忌	秋ぐみのかくて赤らむ風雨急	茱萸の木としごかれていく野間哉	磯山や茱萸ひろふ子の袖袂
*藤田かもめ	*北畠 明子	*池田 久恵	加藤知世子	山口 誓子	石田 波郷	川端 茅舎	前田 普羅	加藤 暁台	加舎 白雄

*は「まるっけ」

鈴の奏

品川鈴子選

薯の花斜^{はす}にみて過ぐ女学生 兵庫 村田とくみ

鯉幟手摺に尾びれじやれてをり

一電車乗りおくれたり更衣

ひげあたる父の鼻唄夏に入る

厨窓開けて隣家の濃紫陽花 兵庫 岩木 眞澄

寄り合いを終えて連れだつ虫見に

靴下げて渡る川瀬の遠かじか

横綱の立ち合いに似てひきがえる 兵庫 鈴木 愛子

梅雨晴れ間人待つ駅の花時計

炎昼を帰り佛間の涼しかり

朝涼し浚ふピアノ「おお牧場」

打水を扇の形に撒く老女 兵庫 明石 文子

夏帽子テキサスからは一人旅

こだわりのハンカチ握り一人旅

何時しかに黄金色まし小判草

人波に夏帯するり吸ひ込まれ

手こぎ舟いま万緑の橋に消ゆ 兵庫 早稲嘉代子

折り鶴を楽しむ母と梅雨籠り

昨日より百歩ふやして雲の峰

夏大根余りに辛くもてあます

道端の毛虫に群れる蟻千匹 兵庫 福島ゆき子

梅雨晴間あれもこれもと気の忙し

みのかさご背びれ胸びれ夏模様

白壁のはがれし旧居紫木蓮

花しようぶ棚田に満たす大柳生 大阪 島 純子

うぐいすの混声合唱まや舞台

まや池にまひまひ忙し吟行日

森青蛙池へとメレンゲを飛ばす 兵庫 藤本つた恵

亡き母の年に我なり時鳥

朝顔の花をかぞえる子の日課

見えぬ目で胡瓜の初なりさわたり

見えぬ目に涙は流る梅雨の入り

紫の鉄線花一つ心満つ 兵庫 北中みやこ

思ふのみ何も出来ずに扇風機

秀 鈴 記

一電車乗りおくれたり更衣

村田とくみ

軽やかな夏の装いに替わると、気分も若やぎ、アクセサリーやハンドバックなどにもお洒落をし、果ては小物まで変えたくなる。鏡に映して確かめたりするうちに、一電車遅くなつてしまった。新しい姿と出合う朝は大慌て。

寄り合いを終えて連れだつ虫見に

岩木 眞澄

山辺に棲み付いて、地域の世話役に押された。やがてお互いに気心が解ると風雅な仲間も多い。近くの谷間に虫が出れば、その情報はいち早くもたらされ、役員会の流れで、揃つて虫を見に行くのも、寄り合いの楽しみの一つである。

打水を扇の形に撒く老女

鈴木 愛子

年配の婦人が打水をして、路地に風情を添えて居る。見

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 鈴木 てるみ //

*選句は全て 品川鈴子

れば一杓ごとに扇の形に美しく撒く。その手つきは、まるで舞扇を広げるようにしなやかで、素養の程が察せられる。また日ごと小まめに水を撒く暮らしぶりも、今では懐かしくもゆかしい。

人波に夏帯するり吸ひ込まれ

明石 文子

夏帯を粋に締めた婦人が人波にさつと消えてゆく、その瞬間を詠んだこの句の女性ならではの感性が素晴らしい。多分駅のコンコースか、イベント会場か、田舎ではない雑踏で和装の後姿をいち早く見てとった作者の観察力と、夏帯とだけ表現したところに脱帽です。着物の事は一切云わないで。

折り鶴を楽しむ母と梅雨籠り

早稲嘉代子

頭と指の運動には折り紙が良いとか、若い時にはしつか

り者で生きてこられた母上にも寄る年波には逆らえず、娘の傍で静かに折り鶴を仕上げている。それを二人の梅雨籠りと表現しているが、何とも優しい気持ちの句です。

白壁のはがれし旧居紫木蓮

福島ゆき子

壁の内側には何かしら蔵や茶室を連想し、はがれていても古くても落ち着きを感じます。漆喰いに瓦という塀は手入れも大変で、若い世代は車の出し入れ自由な屋敷を好むため、年毎に荒廃し下地の赤土が顔を出しているのでしょう。色彩感覚の良い句で下五が白木蓮では面白くない、紫がきいています。

森青蛙池へとメレンゲを飛ばす

島 純子

蛙でありながら陸上や樹上で生活する、でも卵だけは水に近いところに産む親心。それを池へ向って幾つもつけているのをメレンゲと見たのが何とも優しい句。へうぐいすの混声合唱まや舞台、同作者。同じ鳥に対しても暖かい気持ちの句です。

亡き母の年に我なり時鳥

藤本つた恵

素直なふと口から洩れた様な句です。誰もがこの思いを経験するのですが、なかなか句にならないのでしょうか。私などは亡母の事を想う毎に、もつといういろと優しい事をしてあげればよかったと後悔しますが、作者は下五に時鳥という文学的な季語を付け、子の気持がいろいろ想像出来る句です。

栗の花煙れる山に母の墓

北中みやこ

栗山にお母様のお墓があり、初夏淡黄色の花曇りの中の一句では、昔栗を食べると子供を思い出すと歌われたそうです。きつとお母様は片時も子の事を忘れずに見守って下さいます。切りとった自然の景が湿っぽくなくて墓をひきたてています。

ケーブルカーおりひめ星に逢いに行く 藤澤希宗子

夢があり、楽しくてメルヘンチックな句です。たった何百米かのケーブルでも、空に向かって私がここに居りますよ逢いに来ましたよと語りかけている姿が目に見えかびます。